

## 第2子を持つ親子のための子育て支援プログラムの構築 — 東広島市子育て支援センターとの協同から —

七木田 敦<sup>1</sup>・清水 寿代<sup>1</sup>・杉村伸一郎<sup>1</sup>・中坪 史典<sup>1</sup>・津川 典子<sup>2</sup>  
富田 雅子<sup>2</sup>・森 依子<sup>2</sup>・周 心慧<sup>2</sup>・本岡美保子<sup>3</sup>

### Construction of Childcare Support Program for two-children families — From Cooperation with Higashi-Hiroshima City Childcare Support Centers —

Atsushi NANAOKA<sup>1</sup>, Hisayo SHIMIZU<sup>1</sup>, Shinichiro SUGIMURA<sup>1</sup>  
Fuminori NAKATSUBO<sup>1</sup>, Noriko TSUGAWA<sup>2</sup>, Masako TOMITA<sup>2</sup>  
Yoriko MORI<sup>2</sup>, Xinhui ZHOU<sup>2</sup>, Mihoko MOTOOKA<sup>3</sup>

**Abstract:** The purpose of this study was to construct a childcare support program for the families who have two children to bring up. With the assistance of Higashi-Hiroshima city and childcare support centers, members from early childhood education research facility in Hiroshima University built up the program. In this program, it is demanded that the supporters draft the program while being conscious of four times, specifically approach-time, core-time, free-time and feedback-time. And this program also has four main components including topics, leaflet, picture books and reflection sheets. According to the practice, supporters can not only grow up with mothers and children by making use of their childcare specialty, but also can build a relationship of mutual trust with the participants. Besides, the support of the high quality is maintained by the collaboration of Higashi-Hiroshima city and childcare support centers and Hiroshima University.

**Key Words:** families with two children, childcare support program, childcare support center, leaflet

#### I. はじめに

日本人女性の「子どもがほしい」と思う理想の子ども数としては「2人」(55.1%)が過半数で最も多く、次いで「3人」(26.7%)である。ところが平成24年度の合計特殊出生率は1.41で、前年比より若干の上昇がみられたが、未だ少子化の状況にある。出産する女性の子どもの数と理想の子ども数とのギャップが解消しない日本の子育て状況については、様々な理由が考えられる。

出産や子育ての情報提供に取り組む一般財団法人「1more Baby 応援団」(東京、理事長・森

雅子前少子化担当相)<sup>注1)</sup>が結婚14年以下の男女計約3千人に実施した調査で、2人目以降の出産をためらう「第2子の壁」があるとの回答が75%もあることを報告している。その内容は「経済的な理由」が86%で最も多く、「1人目の子育てで手いっぱい」43%、「自身や配偶者の年齢的理由」42%、「産休取得のしやすさや職場復帰など「仕事上の理由」38%などであった。晩婚化による出産年齢を考慮した場合、現実を持つことが可能な子どもの人数が限られてくること、養育費の負担感が子どもを持つか否かの判断に影響すること、これ以上育児の心理的・肉体的負担に耐えられないからという理由や、仕事と生活・育児の両立に対する不安などの要因があると考えられる。

そのような現実の中でも、なお半数以上の女

1 広島大学大学院教育学研究科  
2 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期  
3 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

性が理想の子ども数を「2人」しているのは、子どもの社会化の観点から、1人っ子よりもきょうだいが存在することにより、社会性が身につくのではないかという養育者の考え方なども背景にあるといえる。

また1人以上の出産の希望をかなえる際に、そのためのサポート体制が充分整っていない現状がある。第1子を育てながら第2子を妊娠中の母親は、第1子の退行現象や2人同時育児の不安などの戸惑いを抱いている。そのため妊娠中から母親と家族に対して幼児期の特徴やかかわり方、第1子が兄姉になる心理的準備のための支援の必要性が指摘されるものの、現状では必ずしもそのニーズに応えられているとは言えない。

また、2人目の出産において母親は妊娠・出産・育児の経験があることから、看護師からの支援が手薄になり、家族のサポート機能が低下傾向にあることも報告されている。たとえば、「初めて子どもを育てている母親を効果的に支援・サポートする日本生まれの参加者中心型プログラム」として人口に膾炙しているBP（ベビープログラム）<sup>注2)</sup>は、対象を第1子出産、子育てをする母親に限定しており、第2子以降を出産した母親の子育て支援には対応していない。しかしながら、経産婦は第1子の育児経験があっても2人の育児を同時に行うことは初めてであること、育児の対象者が増えることから、初産婦と同様に、2人の親になるという新たな役割課題を達成し適応していくための支援が必要であると考えられる。

そこで、本研究では、東広島市の協力を得て、第2子を持つ母親の支援ニーズに応えるために、子育て支援センターが中心となって実施できる支援プログラムを開発し、評価することを目的とする。開発を目指すプログラムは、従来行われている母親支援として一般に周知されている両親学級や母親学級とは異なる、第2子の母親に特化した内容で構成される支援内容を含むものである。

## II. 実施の手続き

### 1. 支援プログラムの方向性と実施内容について、東広島市内の子育て支援センター（24カ所）の支援担当者に対するニーズ調査

前述の目的を達成するため、東広島市内の子育て支援センターに対し、第2子を持つ母親に対する子育て支援において、必要とされる支援

とは何かを明らかにするためのアンケートを行った。その結果、きょうだいの育ち（24人）、母親のストレス軽減（24人）、子育てに関する社会資源の周知（4人）、発達の理解（14人）、大人の生活と子どもの育ち（10人）、などがプログラムで取り上げる内容として妥当であるとの結果であった。

また併せて実施した自由記述なども参考にし、本プログラムの方向性を、(i) 対子ども支援の内容（きょうだいの育ち、発達の理解、かかわり）、(ii) 対大人支援の内容（母親のストレス軽減、大人の生活と子どもの育ち、社会資源）とした。これを受けて、支援プログラムの内容は、新たな家族成員を迎え入れる体験は、家族が発達を遂げるライフイベントである（磯山、2014）ということ留意すること。さらには(i) 子育て支援に関わる人が、今まで経験したことを出し合い、整理することができる（知識の整理と共有）場とすること。また(ii) 子育てに関わる知識が増え、(iii) 様々な社会資源に出会い、つながる機会（ネットワークの広がり）になること、を目的とすることが確認された。また今回目指す支援プログラムは、支援者側の「保育」の専門性を活かしたプログラムであること、また、親も子（特に第1子）も成長できるプログラムにすることが目的となった。

## 2. スケジュール

このプログラム構築スケジュールには、201X年度の春から夏にかけて広島大学メンバーによる、ニーズ分析・プログラム設計・開発期がある。また、年度の後半、2カ所の協力支援センターにおいて実践がされた。1カ所の支援センターの実施後、支援者会議で報告が行われ、実践は評価検討後、修正された。プログラム構築の経過は表1で示した。

## III. プログラムの方針

### 1. プログラムの内容

#### (1) 第2子を持つ親子のための子育て支援プログラムコンテンツ

〈時間の組み立て〉

本プログラムで支援者は、以下に述べる4つの時間割から構成されたプログラムを立案する。支援者は、それぞれの時間を意識することで、そのとき行うことの意味を確認することができる。

表1 スケジュールの経過

年 月	ニーズ分析		プログラム設計・開発		実践・報告・評価		3~
	201X/3~7	8月上旬	9月上旬	10・11・12	12・201X+1/1・2		
大学メンバー	・事前調査	第一回支援者会議： ワークショップ1	第二回支援者会議： ワークショップ2	第三回支援者会議（12月）： K・F実践報告・絵本配布	第四回支援者会議（2月）： S実践報告	研究報告	
	・絵本選定依頼⇒Kこども図書館	「きょうだいに関する相談内容と対応」	「利用できる社会資源の役割と特徴」：絵本紹介				
	・プログラムのためのリーフレットの作成⇒各実践での使用⇒修正⇒配布へ						
	・プログラムで使用絵本の選定⇒紹介⇒配布（市内子育て支援センター及びプログラム参加親子へ）						
東広島市	担当者と事前会議・支援者会議の準備の話し合いと開催						
K・F子育て支援センター				事前確認（2回）・実践（2回）・振り返り・発表			
S子育て支援センター					事前確認（2回）・実践（3回）・振り返り・発表		

①アプローチタイム

この時間は、保護者も子どもも支援者も、その場に慣れるための時間である。朝の受け入れや、コアタイムまでの自由遊びや自由な語らいが、この時間にあたる。また、プログラムの中で一息つき、次のコアタイムへと橋渡しをするような時間も、該当する。

②コアタイム

支援者が提案し進行する、このプログラムにとってメインともいえる時間である。アイスブレイクや、リーフレットを参考にしたテーマの共有、語り合いの時間、親子遊び、絵本の読み語り、おやつタイムなどがこの時間にあたる。保護者の様子に合わせて臨機応変に、時には一息つきながら行うことが望ましい。

③フリータイム

コアタイムの後の自由な語らいや親子でのひととき、お昼ご飯を食べる時間などが、この時間にあたる。参加は、保護者の自由選択にする。

④フィードバックタイム

この時間は、保護者に保護者用振り返りシートを記入してもらう時間、支援者が支援者用振り返りシートを記入する時間、支援者同士で振り返りの時を持つ時間のことである。支援者は、振り返りで得た示唆を、今後のプログラムに生かすようにする。後日、支援者同士が所属施設を越えて、振り返りや学びの機会を持つ時間でもある。

〈プログラムの必須事項〉

本プログラムは、支援者が内容や構成を組み立てる、自由度の高いプログラムである。しかし、プログラムのデザインは、以下に示す4つの項目にそって組み立てることが求められる。

①共有テーマの用意

支援者は必ず、テーマを念頭において進める。テーマがあることで、保護者に気づき生まれ、

保護者同士の関係性も深まると考えられる。

②リーフレットの活用

リーフレットには、本プログラムの基本的な事項や、東広島市内の支援者たちによって出されたテーマやアイデアが掲載されている。プログラムの方向性を示すリーフレットを活用することで、支援内容の一貫性が担保されると考える。なおこのリーフレットは、支援者がプログラムを進める為のものであり、保護者に見せる必要はない。

③絵本の活用

絵本はフリータイムでの子どもたちの遊び環境や、コアタイムでの読み語りに活用することが望ましい。絵本があることで、空間をともにしている実感が生まれ、場が和むと考えられる。絵本の選択や活用の場を考えることは、支援者の専門性を生かすことになる。

④振り返りシートの活用

振り返りシートを用いて振り返りを行うことで、保護者、支援者ともに新たな気づきが生まれる。

支援者は保護者用振り返りシートを回収した後にコピーを取り、速やかに返却する。そして、名前部分を削除した上で、配布物や掲示物として保護者にフィードバックする。他の人の気づきが、新たな学びのきっかけにもなり、仲間意識の醸成に繋がる。また支援者は、次回の立案や日々の支援に、支援者シートを生かすことができる。

〈テーマの選択〉

テーマは、第1回・第2回の支援者会議において支援者から出された、保護者の悩みとその時の対応をもとに設定し、リーフレットに掲載している。支援者は、このテーマの中から、参加者にふさわしいものを各回1つずつ選び、コアタイムのワークのテーマとする。支援者が

テーマを念頭においてワークをすることにより、保護者に気づきが生まれ、保護者同士の関係性も深まる。

#### 〈支援者と保護者，子どもたちとの協同活動〉

支援者は、自分の思いだけでプログラムを引っ張っていくのではなく、保護者や子どもたちからの提案なども取り入れながらプログラムを行うことも必要になる。つまり、支援者・保護者・子どもたちの3者が協同でプログラムを進めていくイメージを持つことが、重要である。

#### (2) 絵本の選択

##### ①アンケートの実施

第2回支援者会議において、Kこども図書館の協力を得て収集した「おにいちゃん、おねえちゃんになったけど…」がテーマの絵本40冊を展示した。実際に、支援者に手に取って読んでもらった後、アンケートを行い、お母さんたちにぜひ読んでほしいと思う本を、支援センターごとに3冊選択してもらった。その結果から、支援センターすべてに配布する本として、最も読んでほしいと言う声が多かった『ちょっとだけ』（瀧村，2007）を選定した。

##### ②絵本の配布

各支援センターには、『ちょっとだけ』（瀧村，2007）と、それ以外にそれぞれが希望した絵本2冊の、計3冊の絵本を配布した。また、本プログラムへの協力者として、プログラムに参加する親子にも『ちょっとだけ』（瀧村，2007）を、1冊ずつ贈った。本プログラム中では、このとき配布した絵本を読み語りの時の一冊として、また保育室の環境構成として取り入れた。

#### (3) リーフレットの作成

##### ①リーフレットの作成過程

リーフレットは、プログラムを実施する際に、支援者が参考にするものである。具体的な内容は、東広島市内の子育て支援センター及び児童館の担当者が参加する2回の支援者会議においてワーキングの結果に基づいて作成され、大きく「子育ての項目」と「社会資源の項目」の2つの部分で構成されている。

まず、第1回支援者会議において、東広島市第2子プログラムを作る意義やプログラムの特徴を説明した後、(i) これまでの経験の中で受けた、きょうだいに関する相談内容、(ii) その相談内容に対する対応について、意見を出し合った。

そして、第2回支援者会議において、大学メンバーが、前回のワーキングの結果を発表し、

その後、東広島市の第2子を持つ親子を支えるために利用できる社会資源とその役割、特徴について意見を出し合った。

2回の支援者会議を踏まえ、大学メンバーは、第2子プログラムの指針となるリーフレットにおいて、(i) 相談内容とその対応、(ii) 社会資源、(iii) 利用できる絵本、といった3つの要素を提案した。

##### ②リーフレットの内容

子育ての項目と社会資源の項目には、それぞれ8つのテーマ（表2参照）が含まれている。各テーマには、〈気持ちを認めよう〉〈本音で話し合ってみよう〉〈先輩ママからの声〉〈支援センターからのアドバイス〉〈おすすめの情報〉などの内容を記載している。また、テーマの特徴に応じて、大学メンバーが推薦する「絵本」についても紹介している。支援者は、プログラムを実施するときに、参加者の気持ちを和らげたり、話し合いやすい雰囲気を作ったりするための情報提供として、事前にリーフレットの内容を参考にし、利用することができる。

表2 リーフレットのテーマ

子育ての項目	社会資源の項目
生活リズムの変化	共に育てる
自分に対するストレス	子育て情報
時間	地域子育てサロン
きょうだいへの関わり	図書館
子どもを預けるということ	公園
第1子への対応	大学
2人一緒に子育ての工夫	地域子育て支援センター
お父さんとの関係	児童館

また、リーフレットには、協力支援センターの実践例も載せている。支援者は実践例を読むことで、実際にプログラムが進行して行く中、前述した〈時間の意識〉や〈必須事項〉がどのように働くかについてのイメージがわきやすく、自分なりの工夫を考える機会にもなるだろう。

## 2. K子育て支援センターとF子育て支援センターの協同による実践

【第1子が未就園児，第2子が6ヶ月以内を対象とした実践】

##### (1) 場所，日時，参加者

開催場所：K子育て支援センター

第1回：201X年11月16日10:20～13:00

第2回：201X年11月21日10:20～13:00

参加メンバーについては、表3の通りである。



表3 第1・2回目参加メンバー(K・F支援センター)

	仮名	第1子年齢	性別	第2子年齢	性別	
1	Mさん	1歳11ヵ月	男	3ヶ月	女	
2	Nさん	2歳9ヶ月	男	4ヶ月	男	1, 2回目欠席
3	Oさん	2歳8ヶ月	男	5ヶ月	男	
4	Pさん	2歳6ヶ月	女	5ヶ月	女	
5	Qさん	2歳6ヶ月	男	2ヵ月	男	2回目欠席
6	Rさん	1歳6ヶ月	女	6ヶ月	男	

(2) プログラムの目的と内容

本プログラムは、2人の子どもを家庭で子育てする(第2子が生後6ヶ月以内)母親を対象とし、子育てに関わる悩みを解消することを目的とする全2回のプログラムである。テーマは、第2子を迎えての上の子変化(第1回目)と親の変化(第2回目)である。プログラムの流れは、表4の通りである。

表4 K・F支援センターにおけるプログラムの流れ

時間	構成要素	活動
10:20	アプローチタイム	1. 受け入れ 2. 自由遊び
10:30	コアタイム	1. うた「こぶたぬきつねこ」 2. 自己紹介※1、「わが子自慢」※2 3. 親子ふれあい遊び「きゅうりができた」 4. 語り合い(保護者ワーク) 5. 絵本「ちょっとだけ」※1 絵本「ぼくもだっこ」※2 6. 親子、ふれあい遊び※1 7. 絵本「くっついた」※1 8. 親子、ふれあい遊び「ひっつきもっつき」※1 9. 今日の感想
11:30	フリータイム	1. おひるごはん 2. 語らい 3. 自由遊び
13:00	フィードバックタイム	・保護者はアンケートを書き、振り返る ・支援者はインタビューで語り、振り返る 解散 ・支援者はアンケートを書き、振り返る

注) ※1: 1回目の活動 ※2: 2回目の活動

(3) 支援の実際

①第1子にとっての初めての場所

アプローチタイムでの受け入れが終わるとほどなくコアタイムが始まった。Oさんの第1子O男は、遊具のある遊びコーナーへ行きたいと愚図り、やがて泣き出す。O男は、母親と共に遊びコーナーに行き遊ぶことで落ち着きを取り

戻した。O男は、会場となった支援センターに来るのは初めてである。アンケートには、「上の子は場に慣れるまでに時間がかかる」という記述があった。

②母親の子育て葛藤と信頼関係

第2回目もコアタイムになるとO男は母親を連れて遊びコーナーに行きたがる。OさんはO男に寄り添う。支援者は、Oさん親子の近くにメンバーと共に移動してプログラムを進行した。暫くしてOさんは自分の子どものせいで皆に迷惑をかけたと思ったのか、涙を拭いながら部屋を出た。その後、対応にあたった支援者と共に部屋に戻りプログラムに加わった。メンバーも静かにOさんを受け入れた。昼食後のフリータイムでは、メンバーと笑顔で語り合うOさんの姿があった。

(4) 利用者の振り返り

2回とも同じメンバーなので話し易く、特に第1子への関わり方について話せたことが良かったとしている。そして、今はどうしようもなく大変な時もあるが、同じ環境で頑張っている人の話を聞いて「自分も頑張ろうと思えた」「もう少ししたら楽になる」という見通しができたと言っている。プログラムの内容については、第1子と共に参加できたのはよかった、第1子ともっと関わりを持ちたかった、絵本が心に響いた、などの感想があった。

(5) 支援者のふり振り返り

コアタイムでは第1子がふれあい遊びに参加しない、母親が部屋を退室するという想定外の事が起きた。赤ちゃんだけでなく、意思をもって行動できる第1子も参加するという点で、BP(ベビープログラム)実践との違いに戸惑っていた。アプローチタイムの時間や環境設定など、大切なのは計画通りにプログラムを進めることではなく、状況に応じた展開ができることだとしている。また、フリータイムでは支援者があまり関与しないことで、テーマに関する語り合いが深まったと感じていた。プログラム立案には綿密な打ち合わせが必要であり時間的な負担があったが、今後も支援センターの普段の行事として取り入れたいとの意向を示していた。

(6) 考察

本実践は、異なる支援センターが協同で行った実践であったため、場所に慣れるまでに時間のかかる乳幼児もいると考えられる。特にO男のように第2子を迎えて間もない退行現象が見られる第1子が、母親との安心できる環境と

時間の確保によって、落ち着いてプログラムに参加できていることから、プログラムの方針の1つであるアプローチタイムの重要性が示唆されたといえる。また、事例2のように、第1子への子育て葛藤による感情表出もあり得る姿といえよう。それでもOさんがフリータイムでメンバーと笑顔で語り合う姿があったことは、少なからず同じ子育て仲間としての信頼関係が構築されていたと考えられる。コアタイムを終えて参加者同士がリラックスして語り合えるフリータイムの存在は、プログラムの目的や繋がりを深めることに効果があったと捉えることができる。

支援者は協同における時間的な負担があったとしているが、既に今後のプログラム展開を視野に入れている。参加者の学びや支援者としての学びが負担感を払拭したと考えられる。今後は支援センター間における連携の在り方についても、検討する必要があると言えよう。

### 3. S子育て支援センターでの実践

【地域子育て支援センター利用者（第1子が未就園児，第2子のほとんどが1歳児）を対象とした実践】



#### (1) 日時，回数，参加者

第1回：201X+ 1年1月18日10:00～13:00

第2回：201X+ 1年1月25日10:00～13:00

本実践は、普段、本子育て支援センターを利用し、家庭で2人の子どもを育てている保護者を対象としている。参加メンバーについては、表5の通りである。

#### (2) プログラムの目的と内容

本プログラムは、日中、2人の子どもの子育てを担っている母親の困り感を解消することを目的とし、2回連続で行われた。プログラムの流れは、表6、表7の通りである。

表5 第1・2回目参加メンバー（S支援センター）

	仮名	第1子年齢	性別	第2子年齢	性別	
1	Aさん	3歳	男	1歳	男	1回目欠席
2	Bさん	2歳	男	0歳	女	
3	Cさん	4歳	男	1歳	女	
4	Dさん	3歳	男	1歳	男	2回目欠席
5	Eさん	3歳	女	1歳	男	
6	Fさん	3歳	女	1歳	男	

表6 S支援センターにおけるプログラムの流れ(第1回)

時間	構成要素	活動
10:00	アプローチタイム	1.受け入れ 2.自由遊び
10:30	コアタイム	1.おやつ：やきいも・お茶 2.えほん：「おおきなかぶ」 3.わらべうた：おすわりやす 4.グループワーク 【保護者ワーク】 [子どもワーク] ・自己紹介 ・話し合い 「助けてもらいたいと思う時はどのような時？」 「きょうだいのどちらを優先するか？」
11:45	フリータイム	1.おひるごはん
	フィードバックタイム	2.語らい 保護者はアンケートを書き、振り返る 支援者は、インタビューで語り、振り返る
13:00		解散 支援者はアンケートを書き、振り返る

表7 S支援センターにおけるプログラムの流れ(第2回)

時間	構成要素	活動
10:00	アプローチタイム	1.受け入れ 2.自由遊び
10:30	コアタイム	1.絵本「おおきなかぶ」 2.親子あそび「うんとこしょ」 3.絵本「おにいちゃんには、はちみつつけき」 4.おやつ（ホットケーキ） 【保護者ワーク】 [子どもワーク] 1.ハンドマッサージ 2.自己紹介 3.色イメージワーク
11:20		4.話し合い 5.ワーク 「私はうちの子が大好きです。」
11:38		
11:45	フリータイム	1.おひるごはん 2.語らい 3.自由遊び
	フィードバックタイム	保護者はアンケートを書き、振り返る 支援者は、インタビューで語り、振り返る
13:00		解散 支援者はアンケートを書き、振り返る

#### (3) 支援の実際

「子どものワーク」について

2回目のプログラムの中で偶然「恐竜たんけんごっこ」が行われた。サブ支援者によると、「恐竜たんけんごっこ」は、子どものために意図的に企画したものではなかった。「(子どもが) わさわさとなったので、外に連れ出したりして、お母さんたちがお話に集中してもらえるように、っていうのを意識して」と語っている。しかし、「恐竜たんけんにいってきます。」と、第

1子の子どもたち5人（1人は行かなかった）が共に目的をもって外に出かけて行った。10分ほどの外出であったが、帰ってきた時、1回目はずっと母親にくっついていたE子が、晴れやかな表情でF子と手をつないで帰ってきた。本プログラムでは、保護者同士のつながりと共に、サブ支援者の配慮により、意図的に第1子同士のつながりを作ることも可能であることが示唆された。

(4) 利用者の振り返り

利用者は、付箋に自身の困り感を書いただけですっきりするとしている。そして思いを出し合うことで、困り感を共有、共感できたとしている。

ワークの効果について利用者は、上の子どもに対してよく怒っていたことにも気づいていた。また最終的には、すべてを解決できたわけではないが、試してみようという前向きな気持ちを得ている。

プログラムの意義については、プログラムがあることで、普段は話しかけられない人に話しかける機会となったとしている。

2回連続でプログラムが行われた意義については、1回目に出されたアイデアを試みることができたこと、それにより効果が見え、その効果を互いに共有できたことに満足感を持っている。

(5) 支援者の振り返り

支援者は、プログラム利用者を支援センター利用者に限定している。そのため、支援者と利用者の信頼関係ができており、プログラムの進行がスムーズであった、参加してほしい親子が参加してくれたとしている。またプログラム利用者は、困っている人だけではなく、ある程度自身で解決、工夫している人も含まれる。それにより、利用者が相互に意見交換し、主体的に考えることができたとしている。

本プログラムの意義については、利用者が普段話をしたことのない人と積極的に話す機会となったとしている。

2回連続でプログラムを行った意義については、利用者が、思いを出しやすくなっていること、子どももリラックスすることで、友達と関わりやすくなったとしている。

プログラム進行方法に関しては、プログラムの内容を多くしないこと、メンバーの様子に合わせて臨機応変に行うことが大切であるとしている。

【第1子が子ども園を利用している保護者を対象とした実践】

(1) 日時、回数、参加者

201X+ 1年2月1日10:00~13:30

本実践は、子ども園に子どもを通わせている保護者を対象とした実践である。参加メンバーについては、表8の通りである。

表8 第8回目参加メンバー（S支援センター）

	仮名	第1子年齢	性別	第2子年齢	性別
1	Gさん	5歳	男	3歳	男
2	Hさん	5歳	男	3歳	女
3	Iさん	6歳	女	3歳	女
4	Jさん	3歳	男	1歳	男
5	Kさん	3歳	女	2歳	女
6	Lさん	3歳	女	1歳	女

但し、第1子は、通園中でプログラムに参加していない

(2) プログラムの目的と内容

本プログラムは、子ども園に第1子を通わせながら2人の子どもを育てている保護者の困り感を解消することを目的としている。プログラムの流れは、表9の通りである。

表9 S支援センターにおけるプログラムの流れ(第3回)

時間	構成要素	活動
10:30	アプローチタイム	1.受け入れ 2.自遊び
10:35	コアタイム①	1.絵本「おおきなかぶ」 2.親子あそび「うんとこしょ」 3.おやつ（やきいも）
10:40		〔保護者ワーク〕
10:45		〔子どもワーク〕
10:55		自由遊び
11:25	アプローチタイム	1.おひるごはん
11:50	コアタイム②	1.話し合い「日頃の子育てで人の手を借りたいと思うこと」 2.ワーク「私はうちの子が大好きです。」
12:40	フリータイム	語らい
13:30	フィードバックタイム	保護者はアンケートを書き、振り返る 解散 支援者はアンケートを書き、振り返る

(3) 支援の実際

話し合いの途中で、G男がピアノの蓋を開けてもらって弾くなどしていた。そのうち、話し合いをしている母親に、「はやくー、はやくー」と何度か繰り返し催促し、それでも取り合わない母親に対して愚図っていた。それでも母親が取り合わないの、「おなかすいたー」といい続けていた。それに対して支援者が「じゃ、ご飯にしよう」と話し合いの途中で区切りをつけた。本事例から、子どもの反応に困っている母親に対して、支援者がどう対応するか、また「臨機応変」という視点の曖昧さに対する課題も与えられた。また本実践では、アプローチタイム

が5分ほどだったことは、1回目2回目とは違う点であり、これによるプログラムへの影響については、今後の課題である。

#### (4) 利用者の振り返り

本プログラムにおいても、悩みの共有、共感が行われた。メンバー同士のアイデア、情報の共有も行われ、自身の子育への取り入れ、工夫をしようという前向きな気持ちが現れている。また、少し世代が上の人たちとワークをすることで、現在の不安が子どもの成長とともに解決ができるという、子育ての見通しもつけている。

#### (5) 支援者の振り返り

支援者にとって想定外のことが起きた本プログラムから、驚きを覚えつつも、メンバーの力を信じながら、支援者としてプログラムの進行や効果に固執しないことが必要だと考えている。

#### (6) 考察

本実践は、支援センター利用者、または子ども園の保護者をメンバーとしている。そのため、プログラム開始時にはすでに支援者とメンバーとの間に信頼関係が形成されており、支援者によるメンバー募集の呼びかけに、スムーズな応答が見られた。またプログラム進行もスムーズであった。

メンバー構成は、支援者が「まんべんなくいろいろな人がいた方がいい。」と語るように、様々な状況のメンバーが含まれている方が、メンバーの主体的学びに有効であるということが分かった。

本実践は、S支援センターの特色である「親子が日々のくらしを楽しむ」という視点を伏線として取り入れていた。そのことが、絵本やおやつなどの工夫、遊びのアイデアなどに現れていた。これらのことは、保育者が得意としていることである。保育者が自身の得意な点や支援センターの特色を活かしてプログラムを構築していくことの重要性が分かった。

### 4. 「にこにこプログラム」構築のために

#### (1) プログラム実施の枠組みと柔軟性

にこにこプログラムは、〈時間の組み立て〉や〈プログラムの必須事項〉などの枠組みがあることによって、支援者同士が共通認識を持つことができるプログラムである。また、それぞれの支援センターの持ち味を生かした内容を、支援者自身の手で創り出すという柔軟さが、特徴の1つでもある。支援者は、本プログラムの立案にあたり、自ずと自分自身や所属する支援

センターに向き合うことになり、自分自身や所属機関の良さにも気付くことができる。それは保護者が、目の前の自分の子どものよさに気付くことと同様であろう。このように本プログラムは、枠組みがありながらも柔軟性があるため、支援者自身が今あるもののよさに気付くという視点を持つきっかけになると考えられる。

#### (2) ピンポイントの効果を狙わない

支援者は、直接的な問題解決を目指すのではなく、保護者が自分自身の思いに気付く、言葉にすることができるように見守る。また、保護者一人ひとりの様子を見て、発言を促す。支援者の思いやプログラムの内容を、盛り込みすぎないようにすることが大切であり、時には沈黙のよさを味わうことも重要である。

#### (3) 支援者の「支援の質」への寄与

テーマの選択やワークの内容は、各支援センターの支援者たちが考える。支援者同士が議論することにより、共同意識が芽生え、日常の「支援の質」の向上にも繋がると考えられる。また、各センターでの取り組みを支援者会議で報告し合い、支援者たちの学び合いの機会を持つことにより、市内全体の「支援の質」に寄与することもできると考えられる。

#### (4) 日常の信頼関係を基盤として

保護者と支援者は、各支援センターにおいて日常からつながりがあることで、互いに安心してプログラムに参加することができる。それは、支援者と子どもとの関係性においても同様である。支援センターで育んだ信頼関係を基盤としたプログラムであるからこそ、支援者と保護者、保護者同士、子ども同士の、さらに一歩進んだ関係作りが期待できる。

#### (5) 支援センター・東広島市子ども家庭課・広島大学幼年教育研究施設の協同

支援センターの支援者は、プログラムの計画や実施を通して、東広島市子ども家庭課・広島大学幼年教育研究施設に支えられる経験を。支援者自身が支えられるという経験は、支援者に支えられる保護者への共感につながり、支援者自身の気づきや成長をもたらすと考えられる。東広島市子ども家庭課は、支援者の実践によって子育て支援の実際の姿を知り、市制に反映させることができる。広島大学幼年教育研究施設は、支援者のとりくみや実践知を分析し、支援センターや東広島市子ども家庭課へフィードバックすると共に、子育て支援の研究を積み重ねることができる。このように3施設が協同



することにより、東広島市内の子育てを支える者同士のつながりが生まれ、より質の高い支援を行うことが可能となるだろう。

### 参考文献

- 磯山あけみ (2014) 第2子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの開発と評価. 国際医療大学審査学位論文(博士)資料.
- 柏木恵子・若松素子 (1994) 「親になる」ことによる人格的発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. 『発達心理学研究』 5, 72-83.
- 小嶋理恵子・兵藤慶子・水旗喜代子・永瀬つや子 (2009) 第2子以降の出産を迎える家族のニーズ. 南九州看護研究誌, 7 (1), 9-15.
- 小嶋理恵子・松島京 (2010) 親になることの支援—当事者の妊娠・出産体験と援助者の役割—. 立命館大学人間科学研究所紀要.
- 照井裕子 (2007) 第2子の出産子育てにおける母親の変化・発達とは？. 日本心理学会第72回大会講演録.
- 瀧村有子・鈴木永子 (2007) ちょっとだけ. 福音館書店.  
(実践で使用された絵本)
- A・トルストイ (再話)・内田莉沙子訳 佐藤忠良 (1966) おおきなかぶ. 福音館書店.
- ジル・ローベル・セバスチャン・ブラウン・な

かがわちひろ訳 (2006) おにいちゃんにははちみつケーキ. 主婦の友社.

三浦太郎 (2005) くっついた. こぐま社.

西條剛央・大島妙子 (2009) ほくもだっこ. 講談社.

瀧村有子・鈴木永子 (2007) ちょっとだけ. 福音館書店.

注1) 一般公益財団法人「1More Baby 応援団」編, (2017) 夫婦の出産意識調査2017. における調査結果 <http://www.1morebaby.jp/report-kazokuchousa/> (2018年3月20日取得).

注2) BPとは、「親子の絆づくりプログラム”赤ちゃんがきた!” (BPプログラム)」でありNPO法人『こころの子育てインターねっと関西 (KKI)』による, 初めての子育てをしている母親と0歳児が一緒に参加するプログラムである。2010年にKKI主催のフォーラムで発表されている。このプログラムは「ベビープログラム」とも呼ばれている。

### 付記

本研究は平成29年度「広島大学地域連携推進事業」に提案した「地域における虐待防止ペアレントトレーニングの効果検証—親が抱えるリスク要因の低減を目指して—」という研究の一環として、東広島市子ども家庭課の協力で実施したものである。